

[症例]

骨腫性エプーリスの1例

横 江 秀 隆 横 田 剛 福 田 正 勝

宮 川 昌 久 鷗 澤 一 弘 渡 辺 俊 英

宮 恒 男 丹 沢 秀 樹

(1998年11月19日受付, 1998年11月27日受理)

要 旨

まれな骨腫性エプーリスを経験したので報告する。患者は56歳, 女性。主訴は右上顎臼歯部腫瘤。7] 歯槽頂相当部に表面滑沢な, 骨様硬25×23×15mmの腫瘤が存在した。X線所見は, 7]相当部に梁状構造または, 骨様の不透過像が認められた。エプーリスと診断し, 切除術を行った。病理組織学的に, 線維性組織のなかに不規則な塊状の骨質が大量に形成されていた。

病理組織診断は骨腫性エプーリス。骨形成性エプーリスの本邦報告例は1966年~98年において86症例あり, 女性は55例で男性は31例, 好発年齢は20~50歳代であった。好発部位は上顎が54例で下顎の33例より多くみられた。本症例では, エプーリスの中に生じた骨は歯槽骨と連絡しており, 骨芽細胞が腫瘤内に多く認められ, これらの細胞が積極的に関与して上部に腫瘍的な骨の増大をきたしたと考えられた。

Key words: エプーリス, 骨形成

I. 緒 言

エプーリスは歯肉に生じた限局性の腫瘤で, 発症頻度の高い疾患である。しかしそのほとんどが炎症性産物で腫瘍性増殖を示すものはまれである。

著者らは上顎歯肉に生じた, 類骨の増生が多量にみられた骨腫性エプーリスについて骨形成性エプーリスの統計とともに報告する。

II. 症 例

患者: 56歳, 女性。

初診: 1998年2月24日。

主訴: 右側上顎臼歯部腫瘤

家族歴, 既往歴: 特記事項なし。

現病歴: 1997年4月頃 7]部歯肉に腫瘤が存在するのに気がついたが放置していた。腫瘤は次第に増大し約10ヶ月後 7]が自然脱落し腫瘤は拇指頭大になったため, 近歯科医より当科紹介され来院した。

口腔内所見: 口腔清掃状態はやや不良であった。7]歯槽頂相当部歯脈に拇指頭大, 骨様硬, 表面滑沢な有茎性の腫瘤が存在し, 対側の歯の圧痕が表面に認められた(図1)。

単純X線所見: 7]相当部に比較的境界明瞭な不透過像の内部に骨様のさらに不透過性の高い像が認められた(図2)。

CT所見: 右上顎骨から連続して発育し境界明瞭な斑状の石灰化もしくは骨化が認められた(図3)。

臨床診断: エプーリス

千葉大学医学部歯科口腔外科学講座

Hidetaka Yokoe, Goh Yokota, Masakatsu Fukuda, Akihisa Miyakawa, Katsuhiro Uzawa, Toshihide Watanabe, Tsuneo Miya and Hideki Tanzawa: A case of epulis osteomatosa.

Department of Oral Surgery, School of Medicine, Chiba University, Chiba 260-8670. Tel. 043(226)2300.

Received November 19, 1998, Accepted November 27, 1998.

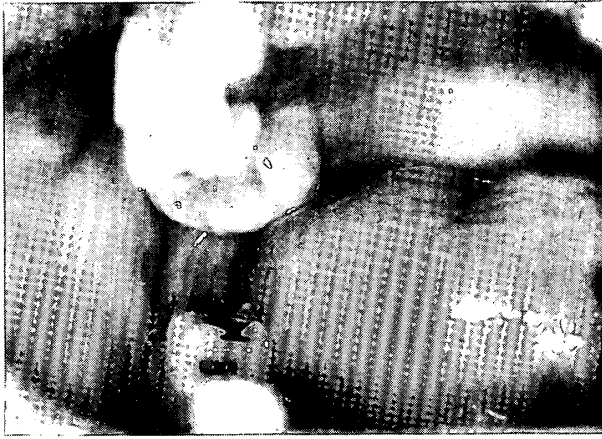


図1 口腔内：7]歯槽頂相当部歯根に拇指頭大，骨様硬，表面滑沢な有茎性の腫瘤が存在している。

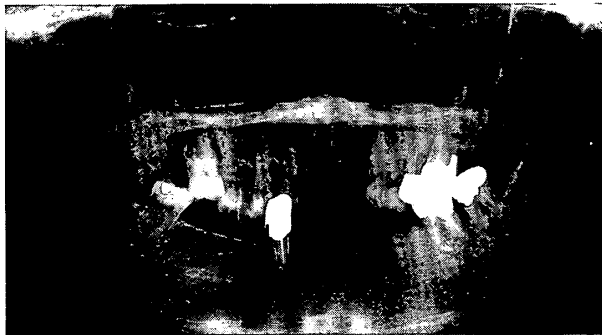


図2 オルソパントモ X 線写真：7]相当部に比較的境界明瞭な不透過像の内部に骨様のさらに不透過性の高い像が認められる。



図3 CT 所見：右上顎骨から連続して発育し境界明瞭な斑状の石灰化もしくは骨化が認められる。

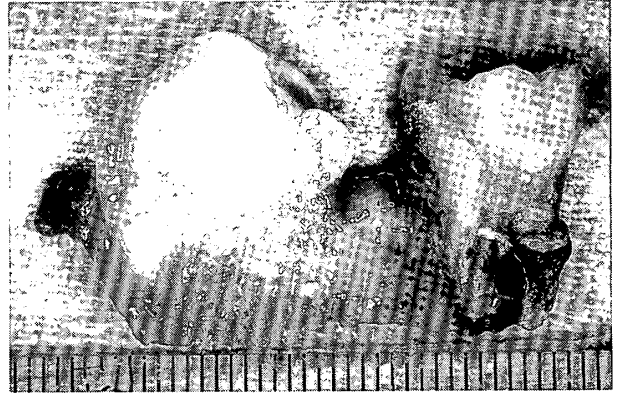


図4 摘出物断面所見：全体的に白色で上部は柔軟であったが基底部にかけて硬く分割は困難であった。

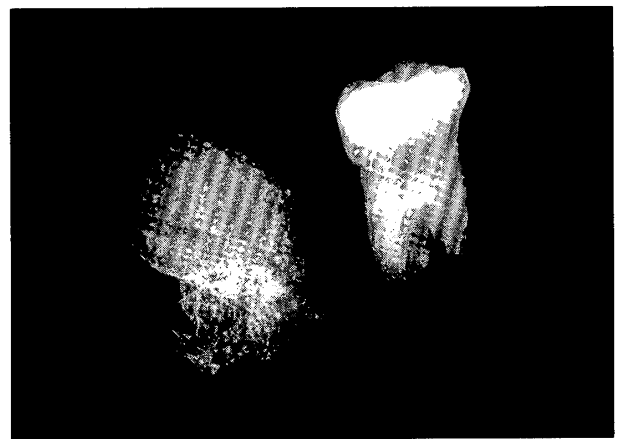


図5 摘出物 X 線所見：腫瘍の内部には X 線不透過像が全体的に認められた。

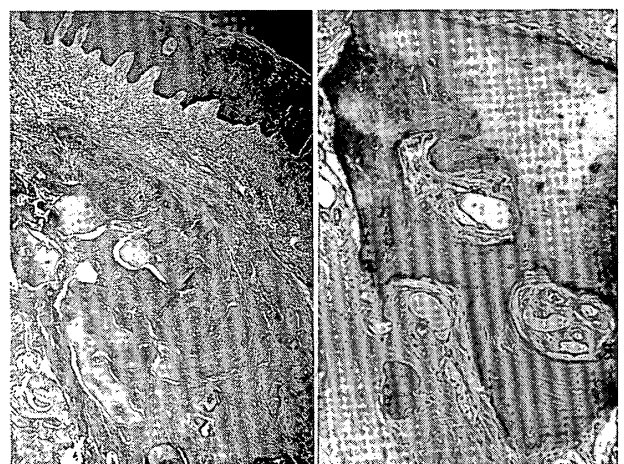


図6 病理組織所見：不規則に増殖した線維性組織のなかに塊状あるいは梁状の骨質が大量に形成されていた。一部には線維骨周囲に沿って骨芽細胞がならんでいた。(H. E 染色 左×40, 右×100)

処置：腫瘍茎部の外側5mmに切開を加え摘出した。6]は高度辺縁性歯周炎に罹患していたためにあわせて抜歯を行った。

摘出物所見：腫瘍の大きさは、 $25 \times 23 \times 15$ mmで歯肉側にかけて骨様硬球状の腫瘍をなしていた。断面は全体的に白色で上部は柔軟であったが基底部にかけて硬く分割は困難であった(図4)。

摘出物X線所見：腫瘍の内部にはX線不透過像が全体的に認められた(図5)。

病理組織所見：不規則に増殖した線維性組織のなかに塊状あるいは梁状の骨質が大量に形成されていた。一部には線維骨周囲に沿って骨芽細胞がならんでいた(図6)。

病理組織診断：骨腫性エプーリス

Ⅲ. 考 察

エプーリスは、一般的に歯肉に生じた良性の限局性腫瘍を総称する臨床診断名として用いられている。その多くは炎症性または反応性の増殖物であって、真の腫瘍であることは少ない。エプーリスの成因は、不適合な充填物、金属冠、義歯などによる歯肉の機械的刺激、多量の歯石や残根による歯肉への慢性的刺激によって炎症性、反応性の組織増殖を惹起するといわれている。またエプーリスは、青春期および成熟期の女性に多く発生し、特に妊娠性エプーリスは出産とともに成長が停止することも多く、成因の全身的影響として女性ホルモンの影響が少なからず関与しているといわれている[1]。

病理組織的には、様々な分類がなされているが、一般的に石川の分類が多く用いられ以下の肉芽腫性、線維性、血管腫性、線維腫性、骨形成性、巨細胞性に分類される[1]。このうち骨形成性の頻度は少なく、石川ら[1]は341例中26例(7.6%)、伊藤ら[2]は129例中5例(3.9%)、好士ら[3]は154例中11例(7.1%)、福田ら[4]193例中55例(28.5%)と報告している。骨形成性エプーリスの本邦報告例は1966年～1998年において86症例あり、女性は55例、男性は31例で性差1.8:1で女性に発生頻度が多く、年齢分布は11か月から90才、平均44.8才で50歳代が22例(25.6%)と最も多くみられた。好発部位は上顎前歯部22例、臼歯部31

例(上顎計53例)で、下顎前歯部14例、臼歯部19例(下顎計33例)であり、上顎に多くみられた。前、臼歯部別では、前歯部36例と臼歯部50例と臼歯部がやや多かった[4-29]。

エプーリスの中に硬組織の形成をみる骨形成性エプーリスを石川らは、1) 骨腫性(造骨細胞があり骨質が大量に形成されたもの)、2) 骨線維性(線維性エプーリスの中に化生によって骨組織が形成されたもの)、3) 線維骨腫性(化骨性線維腫と同様な像を呈するもの)、4) セメント質形成性(硬組織がセメント質に類似しているもの)に細分している[1]。

本症例では、エプーリスの中に生じた骨は歯槽骨に連絡しており、骨芽細胞が腫瘍内の骨組織に大量に認められこれらの細胞が積極的に関与し、上部に腫瘍的な骨の増大をきたしたと考えられることから骨腫性エプーリスと診断した。

骨形成性エプーリスの本邦報告例においても線維性組織の中に一部硬組織が認められるが骨芽細胞など造骨細胞はなく、反応性もしくは化生によって形成された骨線維性と思われる症例も多く含まれており本症例のように骨質を大量に形成する骨腫性エプーリスは浜田ら[30]の報告にみられるようにエプーリス874例中14例(1.6%)ときわめてまれである。

SUMMARY

We have described a rare case of epulis osteomatosa. The patient was 56 years old woman and was admitted to our hospital with a chief complaint of tumor formation of the right maxillary molar region. The tumor with smooth surface was present at 7] gingiva, which was bone-like hard and $25 \times 23 \times 15$ mm in size. X-ray radiograms showed radio-opaque trabecular structures or bony mass with small particles in the tumor. The tumor was clinically diagnosed as epulis and was excised. Histopathologically, many irregularly shaped bone formation was observed among proliferated fibrous tissues. These findings were compatible with epulis osteomatosa. We reviewed 86 cases of epulis osteoplastica in Japan from 1966-1998. Among them, fifty-five were female and 31 were male. As to the location, the upper jaw (54 cases) was slightly more frequent than the lower jaw (33 cases). It was suggested that developed bone containing many osteoblasts in

epulis was connected to the alveolar bone, and that these cells were aggressively associated with preceding tumor like ossification.

文 献

- 1) 石川梧朗. 口腔病理学・第4版, 京都: 永末書店, 1990; 237.
- 2) 伊藤秀夫. エプーリス (Epulis). 歯界展望 1958; 15: 254-61.
- 3) 好士和夫. エプーリス (歯腫) の臨床的ならびに組織学的研究. 口腔病会誌 1959; 26: 1666-82.
- 4) 福田容子, 戸塚盛雄, 武田泰典, 鈴木鐘実. エプーリスの病理学的検討第1報 症例の概要. 岩医大歯誌 1985; 10: 136-41.
- 5) 大井 浩, 三宅正彦, 堀 稔, 金子 治, 小田泰之, 石井俊彦, 風間敏偵, 松江高光, 工藤逸郎. 骨形成性エプーリスの5例. 日大歯学 1987; 6: 9-15.
- 6) 神部義則, 生田裕之, 河原絵美子, 生田明敏, 鈴木英哲, 鹿島 勇. 骨形成性エプーリスのエックス線所見について. 神奈川歯学 1992; 27: 115-9.
- 7) 加藤隆三, 川尻秀一, 西井雅博, 室木俊美, 熊谷茂宏, 中川清昌, 山本悦秀. 当科におけるエプーリスの臨床病理学的観察. 日口科誌 1991; 40: 423-31.
- 8) 森 恵造, 浜川裕之, 谷岡博昭. 骨形成性エプーリスの1症例. 口外誌 1988; 34: 163-9.
- 9) 田村章子, 山口政彦, 山崎博史, 野田 忠, 石木哲夫. 無歯期の女兒に生じた骨線維性エプーリスの1例. 小児歯科学雑誌 1984; 22: 381-6.
- 10) 岩崎弘治, 梶川幸良, 大西 真. 63症例の臨床的観察. 日口外誌 1976; 22: 74-9.
- 11) 上原裕之, 本田政彦, 内田憲治, 坪井栄宏, 阿久津透一, 関和忠信, 寺門正昭, 佐藤 廣. 骨形成性エプーリスの3例. 日大歯学 1994; 68: 172-6.
- 12) 武田幸彦, 加藤蒸治. 下顎に生じた骨形成性 (骨腫性) エプーリスの1例. 日口外誌 1994; 41: 103-5.
- 13) 徳岡敏一, 角田佐武郎, 南雲正男. 骨形成性エプーリスの石灰化について. 日口外誌 1992; 38: 114-8.
- 14) 戸高勝之, 水城晴美, 河村哲夫, 松島凜太郎, 小野敬一郎, 岡野秀成, 花井 康, 小野史郎, 柳沢繁孝. 骨形成性エプーリスの1例. 日口外誌 1985; 31: 110-4.
- 15) 中村英司, 小野貢伸, 船岡孝誠, 戸塚靖則, 飯塚正, 雨宮 璋. 巨大な線維骨腫性エプーリスの1例. 日口科誌 1995; 44: 147-50.
- 16) 大内知之, 八重樫和秀, 吉川泰子, 中出 修, 菅野秀俊, 阿部英二, 高田行久, 賀来 亨, 奥山富三, 九津見雅之. 骨形成性エプーリスの3例について. 東日本歯学雑誌 1987; 6: 49-56.
- 17) 加来慶久, 河野憲司, 水城晴美, 柳沢繁孝, 清水正嗣. 硬組織形成性エプーリス8例の臨床病理学的検討. 日口科誌 1995; 44: 275-81.
- 18) 三沢知裕, 原 英之, 大野 敬, 高橋顕仁, 鈴木晴彦, 高田和雄, 足立 深, 河原裕憲. 骨線維性エプーリスの4症例. 東北歯大誌 1983; 10: 40-50.
- 19) 大沼照美, 中村武夫, 金子賢司, 石田次郎, 吉田明, 福本雅彦, 大竹繁雄, 田中秀邦, 山本浩嗣. 10歳男児に見られた骨形成性エプーリスの1例. 日大口腔科学 1993; 19: 224-8.
- 20) 楠本俊司, 鴨川卓也, 宮本奉和, 後藤文雄, 若江秀敏, 富岡徳也, 北村勝也. 骨形成性エプーリスの1例. 日口科誌 1989; 35: 143-8.
- 21) 北代俊二, 加藤 斉, 中尾恵之輔, 大野明彦. 先天性エプーリスおよび巨大な骨形成性エプーリスの各1例について. 日口外誌 1989; 35: 52-7.
- 22) 長谷川雅博, 河住 信, 中村千仁, 川上敏行, 上田章夫, 矢ヶ崎 崇, 伊藤恒夫, 北村 豊, 加藤倉三. Epulis Osteofibramotosa Cementoplastisa (セメント質形成性骨線維腫性エプーリス) の1例. 松本歯学 1982; 8: 237-42.
- 23) 白木 豊, 北山誠二, 梅村長生, 池田憲昭, 蜂矢祐司, 河村俊彦. 25年を経過した巨大な骨線維性エプーリスの1症例. 日口外誌 1983; 29: 213-5.
- 24) 河野生司, 伊東隆利, 山内 透, 与儀実彦, 伊東武嗣. 骨形成性エプーリスの1例. 日口外誌 1984; 30: 135-9.
- 25) 内藤講一, 北島 正, 服部 徹, 宇野克美. 骨形成性エプーリスの1例. 日口科誌 (抄) 1987; 907.
- 26) 大久保章朗, 杉原一正, 大崎雅美, 石神哲郎, 栢木郁哉, 山下佐英. 骨形成性エプーリスの1例. 日口科誌 (抄) 1996; 788.
- 27) 川崎五郎, 空閑祥浩, 近藤裕子, 徳久道生, 水野明夫, 岡辺治男. エプーリスの臨床統計的観察およびいわゆる骨形成性エプーリスについて. 日口科誌 1996; 45: 80-5.
- 28) 伊藤達也, 西嶋 寛, 角南次郎, 三好憲裕, 西川光治, 花野響子. 骨形成性エプーリスの1例. 小口外誌 1995; 5: 65-8.
- 29) 中蔭 哲, 矢ヶ崎 崇, 山岸眞弓美, 山田哲男, 上田章夫, 北村 豊, 千野武廣, 長谷川博雅. セメント質形成性骨線維腫性エプーリスの1例. 日口外誌 1990; 36: 102-106.
- 30) 浜田義信, 浜野弘規, 陳 盛輝, 安彦善 裕, 長田一宏, 片柳匡司, 橋本貞充, 井上 孝, 下野正基. エプーリスに関する統計学的研究 - 病理総論的立場からの考察 -. 歯科学報 1989; 89: 1507-15.